

# 戦略的レバーとしての生成 AI：アイ・ピー・ファイン社「THE 調査力 AI」と市場ポジショニングの徹底分析

Gemini Deep Research

## 第 1 章 エグゼクティブサマリー

本レポートは、アイ・ピー・ファイン株式会社が提供する R&D 知財グループウェア「THE 調査力 AI」に新たに搭載された生成 AI 機能群、および同社の市場戦略について、多角的な視点から詳細な分析を行うものである。同社による生成 AI の導入は、単なる機能追加に留まらず、プラットフォームそのものを、安全かつ高度にカスタマイズ可能な R&D ワークフローの中核ハブとして再定義する戦略的転換であると結論付けられる。

本分析から得られた主要な結論は以下の通りである。

- 能動的インテリジェンスシステムへの進化:** 新たな AI 機能群、特にユーザーが独自の AI 指示を作成・共有できる「マイ AI ワーカー」は、「THE 調査力 AI」を従来の受動的な分析ツールから、ユーザー自身が業務に合わせて AI をプログラムし、能動的に活用するインテリジェンスシステムへと昇華させている。
- 市場への戦略的投下:** 2025 年 9 月に開催された「知財・情報フェア&コンファレンス」への出展は、これらの革新的な機能を市場に披露し、企業が抱える AI の有用性とセキュリティに対する懸念に直接応えるための極めて重要な機会となった。
- 明確な差別化要因:** アイ・ピー・ファイン社の競争優位性は、①共同作業ワークフローへの深い統合、②化学分野に特化した高精度な日本語翻訳スタック、③将来的なオンプレミス環境での AI 導入を見据えたセキュアな開発ロードマップ「大和 YAMATO」の 3 点に集約される。

以上の分析に基づき、本レポートは、AI を単なる周辺的な検索ツールとしてではなく、知的財産 (IP) および研究開発 (R&D) のコアプロセスに深く組み込むことを目指す組織にとって、「THE 調査力 AI」が真剣な検討に値するソリューションであると提言する。

## 第2章 知的財産管理における AI の進化と市場環境

知的財産管理の現場は、グローバルな特許データ量の指数関数的な増加、技術の複雑化、そしてイノベーションサイクルの加速という三重の圧力に直面しており、大きなパラダイムシフトの渦中にある。この変化に対応するため、AI 技術の活用はもはや選択肢ではなく、必須要件となりつつある。

### AI が解決を目指す業界の構造的課題

- **情報過多（インフォメーション・オーバーロード）**：世界中から日々生み出される膨大な特許・非特許文献を人手で網羅的に分析することは、物理的に不可能となっている。AI は、この情報の洪水から関連性の高い情報を迅速にフィルタリングし、優先順位を付けるための強力な手段を提供する<sup>1</sup>。
- **言語障壁**：グローバルな研究開発活動においては、中国語、英語、ドイツ語など、多言語の文献をシームレスに分析する必要がある。しかし、機械翻訳の品質は依然として重要なボトルネックであり、誤訳は致命的な判断ミスにつながりかねない<sup>3</sup>。
- **主観性と非一貫性**：人間による特許評価は、調査担当者の経験、専門知識、あるいはその日のコンディションによって結果にばらつきが生じる可能性がある。AI は、客観的な基準に基づいた分析を導入することで、評価の標準化と一貫性の向上に貢献することが期待される<sup>2</sup>。
- **セキュリティと機密保持**：これは企業にとって最も優先度の高い懸念事項である。出願前の発明情報や企業の機密戦略といった極めてセンシティブなデータを、パブリックなクラウド基盤の AI モデルに入力することは、情報漏洩や営業秘密の喪失という看過できないリスクを伴う<sup>5</sup>。

### 市場が求める AI ソリューションの要件

現在の市場は、単なる AI 搭載の検索機能を超え、要約生成、技術トレンド分析、競合他社インテリジェンス、そして業務プロセスの自動化といった、より高度な機能を求めている。特許調査のコストを削減し、精度を向上させるツールへの期待は非常に高い<sup>6</sup>。

知的財産分野における AI の導入は、「導入するか否か」という議論の段階を終え、「いかに効

果的かつ安全に導入するか」という実践的なフェーズに移行している。市場の成熟に伴い、評価の焦点は AI 技術の目新しさから、具体的な投資対効果（ROI）、揺るぎないセキュリティ、そして既存の業務フローへの深い統合性へと明確にシフトしている。したがって、この分野に参入する新たなソリューションは、AI を搭載しているという事実だけでは評価されず、これらの第二世代とも言える課題をいかに巧みに解決するかが厳しく問われることになる。

## 第 3 章 基盤プラットフォームとしての「THE 調査力 AI」の深層分析

「THE 調査力 AI」の真価を理解するためには、その設計思想の根幹を分析する必要がある。提供される資料は、本製品が従来の「特許検索システム」とは一線を画す「知財業務グループウェア」として位置づけられていることを明確に示している<sup>3</sup>。これは、単発の検索行為を支援するツールではなく、継続的な知財業務プロセス全体を支える協業基盤を目指すという、同社の哲学の表れである。

### プラットフォームを支える中核的アーキテクチャ

- **中央集権型情報ハブ**: 本プラットフォームは、単一の特許データベースに依存するのではなく、様々なデータソースをマージし、連携させて検索できるアーキテクチャを採用している<sup>3</sup>。これにより、研究開発、知的財産、経営企画といった複数の部門が、組織横断的かつ俯瞰的な視点から情報を活用することが可能となる。
- **ワークフロー中心設計**: 調査テーマの全体像をマトリクス形式で可視化・蓄積する「THE 調査力マトリクス」<sup>3</sup>や、従来の SDI（Selective Dissemination of Information）に代わり、継続的な情報監視と気づきを促す「CLI（Continuous Landscape Intelligence）」<sup>3</sup>といった機能は、その設計思想を象徴している。これらは、一度きりの検索ではなく、担当者間での分担や進捗管理を含む、継続的なプロジェクト遂行のために最適化されている。
- **高忠実度な翻訳スタック**: 「THE 調査力 AI」が持つ、見過ごされがちだが極めて戦略的な強みが、この二重構造の翻訳エンジンである。主要 11 カ国の特許全文を網羅する高品質な Japio の「Japio-GPG/FX」と、化学・ライフサイエンス分野の特許・論文翻訳に特化した化学情報協会の「JAICI AutoTrans」を統合している<sup>3</sup>。このデュアルエンジン・アプローチは、特に専門技術分野において他社に対する大きな優位性となる。

本プラットフォームの根源的な強みは、単に AI 機能を後付けしたのではなく、AI が最大限に

能力を発揮できる「データとワークフローを第一に考えた」アーキテクチャにある。特に、専門分野に特化した高品質な翻訳スタックは、単なる利便性向上のための機能ではない。それは、多くの AI システムが直面する「Garbage In, Garbage Out（質の悪い入力からは、質の悪い出力しか得られない）」という根本的な問題を、データ入力の段階で解決するための戦略的な布石である。

市場分析では、AI プロジェクトが期待外れに終わる最大の理由の一つとして「入力データの品質」が挙げられている<sup>5</sup>。この課題に対し、「THE 調査力 AI」は、Japio を通じてグローバルな特許情報を高品質な日本語データとして提供することで、真正面から取り組んでいる<sup>3</sup>。さらに、一般的な機械翻訳が苦手とする複雑な化学物質の命名規則を正確に翻訳するために特別に設計された「JAICI AutoTrans」を組み込むことで、もう一段階上の品質を確保している<sup>3</sup>。その結果、新たに導入された生成 AI 機能がこれらのデータを処理する際、極めて信頼性の高い情報基盤からスタートすることができる。これは、AI が生成する要約、キーワード抽出、比較分析といった出力結果の信頼性を飛躍的に高めることにつながり、特に化学、製薬、素材科学といった分野の企業にとって、決定的な競争優位性をもたらす。

## 第 4 章 新生成 AI 機能「AI ワーカー」スイートの機能別分析

アイ・ピー・ファイン社は、「調べる・考える・まとめる」という一連の知的生産活動を支援する統合的な機能群として、新たな生成 AI スイート「AI ワーカー」を導入した<sup>3</sup>。本章では、このスイートを構成する 3 つの主要機能を個別に分析し、その戦略的価値を評価する。

表 1: 生成 AI 機能の概要と戦略的インパクト

| 機能名           | コア機能                                              | 主要なユースケース                     | 戦略的ビジネスインパクト                      |
|---------------|---------------------------------------------------|-------------------------------|-----------------------------------|
| ChatGPT 要旨・KW | 特許文献（名称・要約・請求の範囲）から約 250 字の日本語要旨と最大 20 個のキーワードを自動 | 大量の特許リストの一次スクリーニング、関連性の迅速な判断。 | ・初期スクリーニング時間の劇的な短縮・調査担当者の認知負荷軽減・ノ |

|            |                                                                            |                                                |                                                                   |
|------------|----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------|
|            | 生成 <sup>3</sup> 。                                                          |                                                | イズ除去プロセスの加速                                                       |
| 製品情報リサーチ   | 生成 AI がインターネット情報を収集・分析し、特許と市場の製品との関連性を調査 <sup>3</sup> 。                    | 自社特許の侵害可能性調査、他社製品に対する自社の権利評価、FTO 調査。           | ・侵害発見能力の強化・特許ライセンス交渉材料の収集・事業戦略と知財戦略の連携強化                          |
| マイ AI ワーカー | ユーザーが独自の業務指示（プロンプト）を AI に与え、定型業務として保存・共有できるカスタム AI エージェント機能 <sup>3</sup> 。 | 特定技術分野に特化した情報抽出、定型的な比較分析の自動化、エキスパートの分析手法の形式知化。 | ・エキスパートのノウハウのスケラブルな展開・独自ワークフローの構築による業務効率の最大化・プラットフォームへのロックイン効果の創出 |

#### 4.1. ChatGPT 要旨・KW (ChatGPT Summary & Keywords)

- **機能:** 本機能は、特許文献の原文言語を問わず、その名称、要約、請求の範囲を基に、AI が約 250 字の日本語要旨と最大 20 個の重要キーワードを自動的に生成するものである<sup>3</sup>。
- **戦略的価値:** この機能は、特許調査プロセスにおいて最も時間を要する初期段階、すなわち一次スクリーニングを直接のターゲットとしている。調査担当者は、全文を読む前に、AI が生成した簡潔な日本語要旨に目を通すだけで、大量の特許文献を迅速にトリアージ（優先順位付け）し、精読すべき重要文献に集中することができる。これにより、調査プロセス全体のボトルネックである「ノイズ除去」のフェーズが大幅に加速される<sup>3</sup>。

#### 4.2. 製品情報リサーチ (Product Information Research)

- **機能:** 生成 AI を活用し、インターネット上の公開情報を探索することで、特定の特許技術と市場に存在する製品との関連性を調査する。特に、「自社特許と他社製品の関連性」

や、その逆のパターンを評価するために設計されている<sup>3</sup>。

- **戦略的価値:** これは、理論的な特許ランドスケープ分析から、実行可能なビジネスインテリジェンスへと橋渡しをする強力な機能である。具体的には、以下のような重要な知財活動を直接支援する。
  - **権利侵害の発見:** 市場に存在する潜在的な侵害製品を特定する。
  - **事業の自由度 (FTO) 分析:** 新製品が既存の他社特許を侵害するリスクを評価する。
  - **特許価値評価とライセンス活動:** 自社特許が実際の商業製品と関連していることを示すことで、その価値を具体的に証明し、ライセンス交渉を有利に進める。

### 4.3. マイ AI ワーカー (My AI Worker)

- **機能:** ユーザーが独自の指示を生成 AI に与え、その指示を「ワーカー」として保存・共有できる、カスタマイズ可能な AI エージェントのフレームワークである。「物質名を抽出する」「パラメータ特許を比較する」といったテンプレートが用意されており、これを基に独自の AI タスクを容易に作成できる<sup>3</sup>。
- **戦略的価値:** 3 つの新機能の中で、戦略的に最も重要なのがこの「マイ AI ワーカー」である。これは単なるツールから「プラットフォーム」への移行を象徴している。
  - **高度なカスタマイズ性:** 企業は、画一的な要約機能にとどまらず、自社の特定の技術ドメインや内部ワークフローに合わせて AI の分析内容を完全にテーラーメイドできる。
  - **暗黙知の形式知化:** 熟練の研究者や知財担当者の分析手法や着眼点を「AI ワーカー」として作成・共有することで、その専門知識を組織全体でスケールさせ、再現することが可能になる。
  - **生産性の飛躍的向上:** これまで手作業で行っていた反復的かつ複雑な分析タスクを、ワンクリックで実行可能な「ワーカー」として自動化することで、圧倒的な生産性向上を実現する。

「マイ AI ワーカー」機能の導入は、プラットフォームの価値提案における根本的な転換を意味する。要約生成のような標準的な AI 機能は、いずれ競合他社も提供し、コモディティ化が進むことが予想される。しかし、ユーザーが独自の AI 指示を作成し、組織内で共有できる機能は、プラットフォームレベルの付加価値を提供する<sup>3</sup>。企業が自社の技術やプロセスに特化した「ワーカー」のライブラリを数十、数百と蓄積していくにつれて、他の IP プラットフォームへの乗り換えコストは劇的に増大する。この独自に構築された「ワーカー」ライブラリは、「THE 調査力 AI」という基盤の上に築かれた、それ自体が価値を持つ独自の企業資産となる。これにより、アイ・ピー・ファイン社は単なるソフトウェアベンダーではなく、顧客企業独自の AI 駆動型 IP 分析手法を共に開発するパートナーとしての地位を確立し、極めて強固で長期的な顧客関係を築くことが可能になるだろう。

## 第5章 戦略的ショーケース：2025 知財・情報フェア&コンファレンスへの出展

アイ・ピー・ファイン社は、2025 年 9 月 10 日（水）から 12 日（金）にかけて東京ビッグサイトで開催される「2025 知財・情報フェア&コンファレンス」へ出展した<sup>9</sup>。このイベントは、同社が新たな生成 AI 機能を市場に正式に披露し、その戦略的重要性を訴求するための中心的な舞台となった。

- **出展の焦点:** 調査によれば、同社の出展テーマは「●生成 AI で加速、無限の可能性！ 3つの業務革新「AI ワーカー」 R&…」とされており、新たな AI 機能群がプロモーションの中心に据えられていることが確認できる<sup>10</sup>。これは、同社がこの新機能の市場投入に並々ならぬ力を注いでいることの証左である。
- **イベント出展の戦略的重要性:**
  - **ターゲット層への集中アクセス:** 本フェアは、日本の知財専門家、企業法務担当者、研究開発部門の管理者が一堂に会する国内最大級のイベントである。自社のコアとなる顧客層と直接対話し、関係を構築するまたとない機会を提供した。
  - **インタラクティブなデモンストレーション:** 「マイ AI ワーカー」のような高度にインタラクティブな機能の複雑さとその真価は、静的な資料よりも、専門スタッフによるライブデモンストレーションを通じて最も効果的に伝わる。潜在顧客は、その場で機能を試し、具体的な導入効果を直感的に理解することができた。
  - **マーケットリーダーとしての地位確立:** この主要イベントで強力な存在感を示すことは、アイ・ピー・ファイン社が「知財 DX」分野のリーダーであり、企業の実際の課題解決に資する生成 AI 活用のパイオニアであるというブランドイメージを市場に浸透させる上で決定的な役割を果たした。

## 第6章 市場評価と競争環境におけるポジショニング

「THE 調査力 AI」は、競争の激しい市場環境の中に存在している。本章では、競合となる主要な AI 搭載 IP プラットフォームとの比較を通じて、同社の評価と独自のポジションを明らかにする。

## 競合プラットフォームとの比較分析

- **Questel Sophia** : グローバル市場における主要な競合の一つ。Questel が保有する広範なデータセットと統合された、全社横断的な AI アシスタントとして位置づけられている。自然言語による検索、要約生成、クレーム分析などを強みとしている<sup>11</sup>。
- **Patentfield AIR** : 国内の有力な競合。こちらも生成 AI を活用し、最大 1 万件の特許群に対する一括処理能力、独自の要約作成、ポートフォリオ分析といった機能の特徴として打ち出している<sup>15</sup>。

表 2: 競合フィーチャーマトリクス : IP プラットフォームにおける生成 AI

| 評価基準         | THE 調査力 AI                           | Questel Sophia                                      | Patentfield AIR                |                                     |                    |
|--------------|--------------------------------------|-----------------------------------------------------|--------------------------------|-------------------------------------|--------------------|
| コアプラットフォーム種別 | 協業ワークフロー型グループウェア                     | 統合データ検索・分析プラットフォーム                                  | 検索・分析プラットフォーム                  |                                     |                    |
| AI のカスタマイズ性  | 非常に高い（「マイ AI ワーカー」によるユーザー主導の指示作成・共有） | 限定的（システム提供の機能が中心）                                   | 中程度（独自要約など設定可能）                |                                     |                    |
| セキュリティモデル    | ・ ISO27001/27017 認証取得 <sup>3</sup>   | ・ オンプレミス/閉域 LLM への明確なロードマップ「YAMATO」を提示 <sup>3</sup> | セキュアなクラウドベースでの提供 <sup>11</sup> | ・ ISO27001/27017 認証取得 <sup>15</sup> | ・ セキュアなクラウドベースでの提供 |

|             |                                                    |                           |                      |
|-------------|----------------------------------------------------|---------------------------|----------------------|
| 翻訳能力        | 非常に高い<br>(Japio の汎用翻訳+JAICI の化学特化翻訳のデュアルエンジン)<br>3 | グローバル対応の高品質翻訳             | 国内外対応の翻訳機能           |
| ターゲットユースケース | R&D と知財部門が連携する継続的なプロジェクト管理と分析業務                    | グローバルな特許調査、法的分析、ポートフォリオ管理 | 大規模な特許群の高速スクリーニングと分析 |

## アイ・ピー・ファイン社の差別化要因

上記の比較分析から、アイ・ピー・ファイン社の独自性と競争優位性は以下の点に集約される。

- **ワークフローへの統合（グループウェア思想）**：多くの競合ツールが検索エンジンに AI 機能を付加したものであるのに対し、「THE 調査力 AI」は、AI 機能を協業プロジェクト管理の環境内に深く埋め込んでいる。これにより、AI の分析結果が分断されることなく、シームレスにチームの業務プロセスに組み込まれる。
- **圧倒的なカスタマイズ性（「マイ AI ワーカー」）**：競合他社も AI による分析機能を提供するが、「マイ AI ワーカー」が実現するユーザー主導でのワークフロー作成と共有の自由度は、他を凌駕している可能性が高い。
- **翻訳品質という土台**：特に技術分野において、Japio と JAICI の専門的な翻訳スタックは、AI 分析の前提となるデータの品質を保証する上で決定的なアドバンテージとなる。
- **明確なセキュリティロードマップ（「YAMATO」）**：多くの企業が抱える最大の懸念事項であるセキュリティに対し、閉じた環境での AI 利用という将来像を積極的に提示している<sup>3</sup>。これは、特に機密情報を扱う企業にとって、非常に強力な訴求力を持つ。

## 市場における評価と評判

入手可能な情報に基づく、アイ・ピー・ファイン社は、日本市場に特化し、R&D および IP 部門の具体的な課題を解決する「知財 DX」ソリューションの専門家として高い評価を築いている。同社代表による書籍の出版<sup>3</sup>や、継続的な製品の機能強化に関するプレスリリース<sup>16</sup>は、同社がこの分野におけるソートリーダーとしての地位を確立しようとしていることを示唆している。

## 第7章 将来展望：次世代構想「大和 YAMATO」とそのインパクト

アイ・ピー・ファイン社は、単に現在の製品を強化するだけでなく、その先を見据えた次世代ソリューション構想「研究開発/知財情報 社内統合インテリジェンス 大和 YAMATO」を掲げている<sup>3</sup>。この構想は、同社の長期的な戦略とビジョンを理解する上で極めて重要である。

### 「YAMATO」構想の核心

- **社内統合インテリジェンス基盤**: 「YAMATO」は、特許情報だけでなく、論文、ニュース、市場情報といった多様な非構造化データをも統合する、セキュアな社内ナレッジベースとして設計されている<sup>3</sup>。
- **セキュリティ第一のアーキテクチャ**: この構想の最も重要な特徴は、その柔軟かつ堅牢なセキュリティモデルにある。企業のファイアウォール内部で動作する「クローズド生成 AI（ローカル LLM）」や、法人契約に基づいたセキュアなクラウド AI と連携することを前提に設計されている<sup>3</sup>。これは、機密情報の外部流出リスクを原理的に排除しようとするアプローチである。
- **R&D ランドスケープ IIC**: 「着想から実現へ」というイノベーションの全ライフサイクルを支援し、経営層や事業企画部門の戦略的意思決定に資する包括的な情報基盤（インテリジェンス・インフォメーション・センター）を提供することを目指している<sup>3</sup>。

## 戦略的インプリケーション

- **企業のセキュリティ懸念への完全な回答:**「YAMATO」構想は、生成 AI の導入を検討する企業が抱える最大の恐怖、すなわち情報セキュリティのリスクに対する直接的かつ説得力のある答えである。オンプレミスやプライベートクラウドでの展開という選択肢を提供することで、アイ・ピー・ファイン社は、防衛、製薬、先端材料といった最高レベルのセキュリティを要求する業界にとって、第一候補となり得るポジションを築こうとしている。
- **対象市場の拡大:**「YAMATO」は、単なる「知財ツール」の枠を超え、企業の「R&D インテリジェンス・プラットフォーム」となることを目指している。これにより、製品の価値提案は知財部門だけでなく、経営企画、事業開発、そして経営トップ層といった、より広範なステークホルダーにまで及ぶことになる。
- **プラットフォームの将来性担保:**2026 年の受注開始を予定しているこのビジョンは<sup>3</sup>、明確で野心的なロードマップの存在を示しており、潜在顧客に対して、プラットフォームの長期的な発展と継続的なイノベーションを保証する強力なメッセージとなっている。

## 第 8 章 総括評価と戦略的提言

本レポートで実施した多角的な分析を統合し、最終的な評価と、導入を検討する企業に対する具体的な提言を以下に示す。

### 分析結果の総括

生成 AI スイートを新たに搭載した「THE 調査力 AI」は、単なる機能強化版ではなく、次世代の知財・R&D 業務基盤として極めて高いポテンシャルを秘めたプラットフォームである。その競争優位性は、①業務プロセスへの深い統合（ワークフロー）、②AI 分析の質を担保する高精度な翻訳（データ品質）、そして③ユーザー自身が AI を進化させる「マイ AI ワーカー」（拡張性）という三位一体の価値提供によって支えられている。

### SWOT 分析

- **強み (Strengths) :**
  - 共同作業を前提とした深いワークフロー統合。

- 化学分野に特化した、競合優位性の高い翻訳エンジン。
- 「マイ AI ワーカー」による高度な AI カスタマイズ性。
- 「YAMATO」構想に示される、明確で強力なセキュリティビジョン。
- **弱み (Weaknesses) :**
  - Questel のようなグローバルプレイヤーと比較した場合、日本市場中心のソリューションと見なされる可能性がある。
  - その高度な統合性ゆえに、導入には単純なツールよりも大きな業務プロセスの見直しを伴う可能性がある。
- **機会 (Opportunities) :**
  - 企業の生成 AI に対するセキュリティ懸念を追い風に、大手企業の大型案件を獲得する好機。
  - 「マイ AI ワーカー」の共有機能を通じてユーザーコミュニティを形成し、エコシステムを構築することで、強力なロックイン効果を生み出す。
- **脅威 (Threats) :**
  - より資本力のある大手競合が、基本的な AI 機能（要約など）を急速にコモディティ化させるリスク。
  - 企業側の AI ガバナンスポリシーの策定遅れなどにより、エンタープライズ市場での導入ペースが想定より緩やかになる可能性。

## 導入検討企業への実践的提言

「THE 調査力 AI」の導入を検討する企業は、以下の戦略的アプローチを取ることを推奨する。

1. **機能ではなく、ワークフロー適合性で評価せよ:** 本プラットフォームの評価は、個々の機能の優劣を比較するのではなく、自社の研究開発から知財権利化に至るエンドツーエンドの業務プロセスにどれだけ深く統合し、改善できるかという視点で行うべきである。
2. **「マイ AI ワーカー」のパイロット導入を最優先せよ:** 真の価値は、そのカスタマイズ性にある。パイロットプロジェクトでは、自社で最も頻繁に発生し、時間を要する分析タスクを自動化する少数のカスタム「ワーカー」を作成し、その ROI を定量的に測定することに注力すべきである。
3. **セキュリティロードマップについて対話せよ:** 高度なセキュリティ要件を持つ組織は、アイ・ピー・ファイン社と「YAMATO」構想およびオンプレミス LLM 導入のタイムラインについて、早期に具体的な対話を開始すべきである。これは、意思決定プロセスにおける重要な評価項目となる。

## 引用文献

1. AI 活用で特許調査はここまで進化する！品質・速度を異次元に - オウンドメディア

ア,9月16,2025にアクセス、

<https://media.emuniinc.jp/2025/07/25/ai%E6%B4%BB%E7%94%A8%E3%81%A7%E7%89%B9%E8%A8%B1%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%81%AF%E3%81%93%E3%81%93%E3%81%BE%E3%81%A7%E9%80%B2%E5%8C%96%E3%81%99%E3%82%8B/>

2. 特許検索に AI は効果的？調査の概要や LLM を活用するメリット、導入事例を徹底解説！,9月16,2025にアクセス、<https://ai-market.jp/technology/llm-patent-search/>
3. 2025 知財のチカラと DX.pdf
4. アイ・ピー・ファイン株式会社「THE 調査力 AI」の特徴や注目ポイント・料金などについて徹底リサーチ,9月16,2025にアクセス、[https://www.shopowner-support.net/attracting\\_customers/manufacturing/ipfine/](https://www.shopowner-support.net/attracting_customers/manufacturing/ipfine/)
5. 生成 AI を活用した日本における特許分析の最新動向と 2025 年 への展望,9月16,2025にアクセス、<https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/ad7a2fe920f586e29ee1.pdf>
6. 生成 AI が変える特許収益化戦略：知財分析の高度化 | PatentRevenue,9月16,2025にアクセス、<https://patent-revenue.iprich.jp/%E5%B0%82%E9%96%80%E5%AE%B6%E5%90%91%E3%81%91/1450/>
7. AI で特許調査のコストを 1000 分の 1 に | 活用戦略を詳しく解説 - オウンドメディア,9月16,2025にアクセス、<https://media.emuniinc.jp/2025/01/10/ai-patent-search/>
8. JAICI 機械翻訳サービス | 化学情報協会,9月16,2025にアクセス、<https://www.jaici.or.jp/translation/>
9. 「2025 知財・情報フェア&コンファレンス」に出展します（開催期間：9/10～9/12） - ジー・サーチ,9月16,2025にアクセス、<https://www.g-search.jp/newsrelease/2025/2025-08-22-01.html>
10. 特許・情報フェア,9月16,2025にアクセス、<https://pifc.jp/2025/>
11. Sophia、生成 AI と知財ソリューション - Questel,9月16,2025にアクセス、<https://www.questel.com/ja/ip-innovation-and-professional-solutions/sophia-generative-ai-and-ip-solution/>
12. AI による特許マッピングとクレーム分析 - Questel,9月16,2025にアクセス、<https://www.questel.com/ja/patent-mapping-and-claim-analysis-with-ai/>
13. Sophia Query: AI クエリビルダー - Orbit Intelligence - Questel,9月16,2025にアクセス、<https://intelligence.help.questel.com/ja-JP/support/solutions/articles/77000574749-sophia-query-ai%E3%82%AF%E3%82%A8%E3%83%AA%E3%83%93%E3%83%AB%E3%83%80%E3%83%BC>
14. Sophia Lab : AI アシスタントで特許を読む - Orbit Intelligence - Questel,9月16,2025にアクセス、<https://intelligence.help.questel.com/ja-JP/support/solutions/articles/77000577395-sophia-lab%EF%BC%9Aai%E3%82%A2%E3%82%B7%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%>

[B3%E3%83%88%E3%81%A7%E7%89%B9%E8%A8%B1%E3%82%92%E8%AA%AD%E3%82%80](#)

15. Patentfield「2024 知財・情報フェア&コンファレンス」出展のお知らせ - PR TIMES, 9 月 16, 2025 にアクセス、  
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000048.000025380.html>
16. 「アイ・ピー・ファイン株式会社」のプレスリリース, 9 月 16, 2025 にアクセス、  
<https://www.atpress.ne.jp/news/company/3612>
17. 知財 DX を実現！「THE 調査力 AI」に「CyberPatent Desk」の国内・海外特許データをダイレクト連係 | アイ・ピー・ファイン株式会社, 9 月 16, 2025 にアクセス、  
<https://www.atpress.ne.jp/news/325965>